

池田大作の人物論

開 沼 正

1. はじめに
2. 池田大作のメッセージ
3. 取り上げられる人物
4. 取り上げ方の特徴
5. なぜそのような特徴がでるのか
6. 人物論の効果

1. はじめに

創価大学の創立者である池田大作は、毎年1月26日の「SGIの日記念提言」をはじめとして、これまでに何度も先駆的な提言を発表している。日中国交正常化提言（1968年9月）は、あまりにも有名である。それら提言の根底にある思想に「世界の一流」と呼ばれる多くの人物が感銘し、池田と会い、あるいは書簡を交わしながら、対話を重ねてきている。そうした池田の行動は、その強い信念はもちろんのこととして、古今東西の古典をはじめとする幅広い教養と人間に対する深い洞察力がなければ到底なし得ることではない。

その教養と洞察力が随所に散りばめられているのが、人物観や人間学と題する池田の多くの著書である。そればかりでなく池田のスピーチにおいても、ありとあらゆる人物が折にふれて取り上げられる。彼らの活躍した分野はもちろん、時代・地域も実にさまざまである。

『私の人物観⁽¹⁾』には18人の人物が取り上げられている。その「まえがき」にもある通り、「芸術家あり、哲学者あり、科学者、政治家にまでわたる」幅の広さで、池田自ら「無原則」かもしれないと謙遜している。

それらの人物が生きた社会背景、生活環境、そして業績や思想などの歴史的事実について調べることは、資料が残っている範囲において、手間のかかる作業とはいえ、それほど困難ではない。しかしたとえある人物について同じ材料が与えられたとしても、その人物をどう評価するのかについては、それこそ人によって千差万別である。

池田は一体どのような人物を取り上げるのか。またどのような点をどう評価するのか。これは池田を師と仰ぐ人間にとっては非常に気になる点である。人物評価には、評価する人間の思想・考え方が色濃く反映されるからだ。本稿では、こうした点について明らかにしていきたい。

2. 池田大作のメッセージ

通常、「人物論」といえば、その人物の生い立ちから死ぬまでを編年形式で順に紹介していくものが多い。そこでは史料批判をはじめとする歴史学的考察が不可欠になってくる。しかし

『私の人物観』によれば、池田の意図はそれぞれの人物の「業績をうんぬんすることにあるのではない」（3ページ）とのことである。人物がかかわった個々の歴史的事実はそれほど重要ではないということである。したがって小説のように架空の人物を取り上げて、その人物にメッセージを託すということも時々ある。

それでは池田は人物論において、どのようなメッセージを伝えようとしているのだろうか。ここで池田の著書『波瀾万丈のナポレオン⁽²⁾』をみてみよう。同書の内容はナポレオンについての対談である。池田との対話者は、フィリップ・モワンヌ（ヴィクトル・ユゴー文学記念館館長）、パトリス・モーラ（歴史学者）、そして高村忠成（創価大学教授・創価教育研究センター顧問）の3氏である。

周知のとおりナポレオンは軍人であり、また政治家だが、太平の時代を無難に勤めた政治家ではない。ブルボン家による絶対主義王政が倒れ、人々の価値観が大きく変わる激流の中で、時代の求める価値を実現した人物である。フランス国内はもちろん国外にも多大な影響を与えた人物だけに、単なる政治家に留まらないさまざまな面をもっている。ナポレオンに関する著作は今まで25万点ほど出版されている⁽³⁾。そうだが、人物論は必然的に多方面からの分析が必要になる。

どの人物でも多方面からの分析が必要なのは言うまでもないことだが、ナポレオンのような人物の場合には特にそうである。あらゆる角度からの人物論が可能である。したがってナポレオンは、人物論一般に託す池田のメッセージを概観する上では「便利な」人物といえる。まずは『波瀾万丈のナポレオン』の目次を見てみよう。

- 第1章 新たな世紀への人間学
- 第2章 「平和のための人材城」を築け
- 第3章 青春の練磨が培った「将軍学」
- 第4章 「人間の幸福」という凱旋門へ
- 第5章 戦いに勝つリーダーの要件
- 第6章 ピラミッドのごとく隆々たる人生の建設
- 第7章 「大いなる世紀」を創るリーダーシップ
- 第8章 「剣の力」は儚く「精神の力」は強い
- 第9章 賢明な民衆パワーが時代を創る
- 第10章 屈せず動ぜず堂々とわが道を
- 第11章 不死鳥のように「間断なき飛翔」を
- 第12章 現代に蘇るナポレオンのメッセージ

同書はナポレオンについての対談にもかかわらず、章のタイトルに「ナポレオン」という言葉が使われているのは最後の章だけである。つまり同書における池田のメッセージは、ナポレオンという人物を題材として使いながらも、人材（後継者）の育成と豊かな人生を歩むための知恵に関するものが大半を占めている。

これはナポレオンに限らず、どの人物を取り上げる場合でもかなり重要なポイントである。しかもそれが庶民の立場、非暴力という観点から語られる。一人の人間としてどのように生きることが真の意味での幸せなのか。責任のある立場になったときにどのように振舞うことが皆の幸せにつながるのか。こうした問いに対する池田の考えが、人物論というかたちで結実して

いる。

歴史上の人物を題材としているのは、具体的な事例を示すためである。「事実は小説よりも奇なり」と言われる通り、実在の人物が実際に行なったことを紹介したほうが、はるかに説得力がある。つまり歴史上の「有名人」を取り上げることは本来の目的ではない。目立たないけれども真摯に生きている多くの人々を讀みたいというのが池田の目的であり、そのためにはよく知られている人物を取り上げるほうが分かりやすい。

誰でも抽象的な言い方でアドバイスを受けるよりは、実際にあった事柄を例にだして説明されたほうが理解しやすいし、説得力があるだろう。したがって人物論における池田の意図は、偉人伝を書くことではなく、人生の壁を越えようと悩む人々を激励することである。

3. 取り上げられる人物

池田はどのような人物を取り上げるのだろうか。『私の人物観』では、「何か」を志して、生涯戦いつづけた」（4ページ）人物を取り上げたとしている。その「何か」について『私の人物観』と『新・私の人物観』を参考にしながら、下記の①から⑤までに分類してみた。人物の職業や活躍した分野とは関係のない分類である。

言うまでもないことだが、人物の一人ひとりが彼らの一生の中で多岐にわたる活動をしている。そうした多面性をもつ人物をひとつのカテゴリーに分類することは困難である。それを十分承知したうえで、一般的なイメージも加味して、あえて分類を試みた。

- ①時代を変えるための何かをした人。
- ②権力（現状維持勢力）に立ち向かった人。
- ③使命（自分が生まれた意義）に徹した人。
- ④強力なリーダーシップで民衆のために尽くした人。
- ⑤後継者の育成に力を注いだ人。

【人物の分類と具体的人物】

①	アレキサンダー、ナポレオン
②	ガンジー、トルストイ、ユゴー、魯迅、ダンテ、マーチン・ルーサー・キング、シモン・ボリバル
③	ベートーベン、ノーベル、ゲーテ、ダ・ヴィンチ、アインシュタイン、ホイットマン、デカルト、ベルクソン、ミケランジェロ、諸葛孔明、コペルニクス、マルコ・ポーロ、鳩摩羅什、キュリー、スピノザ、シュリーマン、エレノア・ルーズヴェルト
④	アショーカ、リンカーン、ネルー、チャーチル、カニシカ、インディラ・ガンジー
⑤	タゴール、ソクラテス、ベスタロッツ

※『私の人物観』『新・私の人物観』に取り上げられている35人を分類した。

①と②および④は、分かりやすくいえば「庶民を苦しめる悪に立ち向かった人」といえる。①と②を分ける明確な基準はないが、①はどちらかと言えば権力側の人間が自ら改革に乗り出す場合が挙げられる。また①に分類される人物については、権力に立ち向かったかどうかは、特に重要な要素ではないともいえる。ただ後者に当てはまる事例については、上記2冊の中には見出せなかった。

②は庶民の立場からのニュアンスが強い。また②は常識を打ち破った人なども分類されよう。常識も一種の権力あるいは権威である。常識は九分九厘の場合、正しいのかもしれない。しかし常識が人々の生活にとって桎梏となっている場合も多い。また「常識の正しさ」を錦の御旗にして偉ぶったり迫害を加える人間も多い。こうした場合に常識を打ち破った人は、権力に立ち向かった人ということになる。

④は近現代の政治家が分類されることが多かった。活動した分野で分類したわけではないと言いながらも、「リーダーシップ」という要素を入れれば政治家が多くなるのは自然だろう。

③は、どの人物にも当てはまる条件ではあるが、その中でも①や②には当てはまらない人物を③に分類した。さらに③には様々な障害を乗り越えて何事かを成し遂げた人物が分類される場合が多い。何かひとつのことについて、それを自分の使命として捉えた人物のことだから、当然といえば当然である。

⑤は文字通りのことである。思想家や教育者が多かった。表では3人だけだが、①から④に分類した人物でも⑤に入れてもいいと思うような人物もいた。

①から⑤に共通することは、結果として人類全体への何らかの貢献をした人物ということである。つまり池田は、人類に対する普遍的価値を生み出した人、あるいはそれを体現した人を取り上げているといえる。

4. 取り上げ方の特徴

第1に日本人が取り上げられることは少ないということである。「はじめに」でも述べたように、池田が取り上げる人物の職業や活躍した分野については傾向や偏りは見られない。ありとあらゆる分野の人物に言及している。架空の人物についてまで、人物評価をすることがあるくらいである。

ただ、日本人については、管見の限りあまり多くはない。『私の人間学⁽⁴⁾』には何人か取り上げられているものの、ある程度の分量をもち、人物の全体像を述べるような人物論は「武田信玄」と「吉田松陰」（両者とも下巻所収）しかない。また前記の表で見た通り『私の人物観』『新・私の人物観』では、日本人は一人も取り上げられていない。

第2に人物の評価の仕方である。どのような点を評価するのかについては、その人物が活躍した分野によって、多少の傾向はある。たとえば政治家であればリーダーシップや民衆がより幸福になるための直接的な行動について目が向けられるし、芸術家であれば目標に向かって努力することの大切さや決して諦めない姿勢、あるいは常識にとらわれない考え方を紹介することが多い。また権力に立ち向かった人物については、その勇気が讃えられ、教育者は他者に対する愛情の深さが評価される。いずれにしても理想を口にしただけでなく、実際に行動を起こした人物が取り上げられる。

どの分野の人物でも共通していることは、「下積み時代」の重要性が強調されていることである。貧困や病気、その他いかなる境遇にあっても読書をし、徹底して勉学に励んだ人物については必ずそのことに触れている。「鉄は熱いうちに打て」などのように若い時の苦労が大切である旨は、池田が常日頃から強調する点でもある。

第3に取り上げた人物の悪い点にはほとんど言及しないということである。少々非常識なところがあつたとしても、その点をとりたててあげつらうことはしない。取り上げる人物は、世間的に見れば必ずしも幸福な人生を送った人ばかりではない。人の最後の数年で人生の勝ち負けが決まるとよく言われる。そうであれば池田は人生の敗者であっても、なるべく悪い面は取

り上げないということになる。

歴史学者による人物論では、その人物の生涯を余すところなく描きたいという欲求があるし、悪い点に言及しないのは中立的ではないという考えもある。あるいは悪い点に言及しないのは、その事実を見落としていると思われることを恐れる。したがって通常的人物論であれば判明する限りの事実を羅列しようとする。池田の人物論はそれとは対照的である。

もちろん池田は、取り上げた人物が全てにおいて理想的な人物であるなどとは思っていない。たとえばペスタロッチはだらしない服装で「分析的知識への無関心、数学の極端な無知（中略）経営や政治的手腕など微塵も持ち合わせ⁽⁵⁾」ない人物だし、ベートーベンは「食事も忘れ、眠りもせず、二十四時間ぶっ通しで唸ったり叫んだり、足を踏み鳴らして作曲した⁽⁶⁾」そうである。

一般社会の常識から見ればペスタロッチは落伍者に近いし、事実そのような見られ方もされた。ベートーベンもかなり変わった人である。変人であるばかりでなく、あるいはそれ故に反社会的な言動も目立った。俗な言葉でいえば「嫌われ者」「鼻つまみ者」である。彼の親、兄弟、友人、近所の人たちから見れば、かなり迷惑な存在だったことだろう。

芸術家であれば「変わった人」で済むかもしれない。しかし政治家の場合は、それでは済まないほど民衆の生活に大きな影響をもっている。それでも人物のウラの面を書き立てるような手法はとらない。政治家であれば権謀術策とは無縁ではないだろう。たとえばナポレオンは負の一面として「侵略者」とか「殺人者」「征服者」などのレッテルを貼られる。ナポレオンから侵略を受けた国々では、特にそうしたイメージが強い。

それにもかかわらず、池田にはそうした一面をあえて強調しないという姿勢が感じられる。仏法者という池田の立場から考えると、もっと厳しい目を向けるのではと提供に意図的な感もある。

5. なぜそのような特徴がでるのか

まず何のための人物論なのかについて確認しておく。「池田大作のメッセージ」でも述べたことだが、池田の人物論の目的は人々を激励することである。そして社会をよりよい方向に変革していける人材を育成することである。歴史学的考察を通して、ある人物に関係する事実を明らかにすることが目的なのではない。このことが通常的人物論とは趣向を異にする理由である。

次に第1の特徴についてである。なぜ取り上げられる日本人が少ないのか。池田は常に「日本は嫉妬の国」と述べているように、人物論で取り上げる価値のある人物が日本の歴史において存在しないと考えているからだろうか。私はそうではないと思う。

日本の歴史上の人物は、日本人にとってはある程度なじみが深い。専門的な知識をもってなくても、名前と簡単な事績くらいは誰でも知っている。たとえば織田信長といえば桶狭間、徳川家康といえば江戸幕府という言葉と同時に、肖像画などによって彼らの人物像まで想像できる人は多いだろう。つまり日本史上に登場する人物については、自分なりのイメージをもっている場合が多く、さらに好き嫌いという感情をしばしば伴っているということである。

池田が人物論で日本史上の人物を取り上げた場合、おそらくそうした一般的なイメージと異なる点を取り上げられることも多いと思われる。人間は多面性をもっているのだから、視点を変えることによって見え方が違ってくるのは当然である。

ところが人間には以下のような特性がある。つまり自分のイメージと異なる話を聞いた場合

は、イメージ通りの話を聞いた場合より話の内容が理解しにくいという特性がある。たとえば織田信長は、マイナスのイメージとして気性の激しい残虐な人物であったというイメージが定着している。そのイメージとは異なり、女性や社会的弱者に対しては細やかな配慮ができる人物であったという話や比叡山を全滅させるような焼き討ちはなかったという話を題材にして何かのメッセージを伝えようとしても、そのメッセージを受ける側はピンと来ない。要するに聞きなれた話のほうが頭にスッと入るのである。

ある人物に言及する池田の目的は、その人物の全貌を紹介することでもなければ、一般的に目新しい歴史的事実を知らせることでもない。あくまでも人々を激励することである。スピーチにせよ書籍にせよ、限られた時間や文字数の中でのことである。しかも激励される側の納得や同感が得られなければ真の激励にはならない。それならばあえて理解されにくいかもしれない人物（イメージの固定した人物、好き嫌いの評価の分かれる人物）をわざわざ取り上げるよりも、日本人のあまり知らない（つまり先入観のない）別の人物を取り上げた方が効果的だからだろう。

架空の人物について取り上げるのは、ストーリーや人物設定がしっかりしている小説の場合である。たとえばアレクサンドル・デュマの『モンテ・クリスト伯』やホール・ケインの『永遠の都』などは代表的である。「人はいかに生きるべきか」という人類に普遍的なテーマに真正面から取り組んでいる作品が多いことが分かる。

池田にとっては、実在の人物だろうが架空の人物だろうが、人々の励みになればそれでいいということであろう。これは池田の師・戸田城聖のもとで、さまざまな文学作品を教材として薫陶を受けたことに原点を見出せる。

第2の点にも池田のメッセージが強く反映される。池田が人物を評価する場合、民衆への奉仕・リーダーシップ・不屈の精神・勇気・人類愛という言葉がポイントになる。こうした条件を兼ね備えた人間になれ、というのが人物論に託した池田のメッセージである。

池田は「全体人間」という言葉をしばしば口にするが、その意味するところは、これらの条件を全て兼ね備えた人間ということであろう。努力して簡単になれるものではないし、過去に全体人間が存在したとも思えない。しかし無限の向上心をもって少しでもそれに近づく生き方は重要であろう。たとえ現在の立場が日の当たらないものであったとしても、日常生活では目標に向かって努力を怠らず、さらには常識人として生きることが結局は幸福な人生であることを強く訴えるものである。

第3の特徴としては、人物の悪い点にはあまり言及しないと述べた。この点も池田の人物論の目的と深く関係している。まず悪い点ばかりの人物論は読んでいても面白くないし、何の価値もない。池田本人が他人から謂れのない中傷をしばしば受けてきたこととも無縁ではないだろう。つまり人の評価（特にマイナスの）ほど当てにならないものはないということを身をもって知っているのである。

人間は誰でも大なり小なり「欠点」をもっている。他人の欠点や悪行ばかりを聞かされていたとしても、そのうち自分に当てはまるものがいくつか出てくる。「自分にも同じ面がある」と思えば気持ちが暗くなる。

それならばその逆をすればいい。人間には必ずいい点もあるのだから、それぞれの人物がもつ多面性の中から「いい点」を取り上げる。そうしたことを繰り返せば誰でもどれかひとつやふたつは当てはまるものがあるだろう。それが見つかれば人は勇気づけられるし、自信がもてる。「桜梅桃李」が実感できるのである。

ゲーテが「偉大なものには何でも反対するクセ」と指摘するように、社会に対して何らかの貢献をした人物に対して嫉妬心から悪口を言うことの愚かさを、池田は人物の取り上げ方でも示していると言えよう。一方、不完全な人間を例として取り上げながらも、理想とする生き方を提示する。つまるところ人物論は池田の方便である。人物のいい点ばかりが取り上げられるのは必然であろう。

総じて言えば、池田の人物論はリーダーとしての視点から書かれているといえよう。人間集団の中にはさまざまな人がいる。大きな集団のリーダーとして、一人ひとりの人を活かそうとすれば、個人的な好き嫌いを表に出すことはできない。個人的には嫌いだと思う人物であっても、その人の長所を見出し、集団のために貢献できる能力を積極的に褒め、活用する。これがリーダーの責任でありリーダーの人物評価である、ということだろう。こうしたリーダーをもてれば、個人にとっても集団にとってもこれほど幸福なことではない。

6. 人物論の効果

池田が社会的に尊敬を集める人物だけに、その発言は影響力が大きい。人物評価についても同じである。人物を通して池田の激励によって勇気づけられた人は数え切れないだろう。池田が意図した効果については改めて言及する必要もないので、ここでは別の効果について言及したい。残念ながらあまりいい効果ではない。

それは池田の人物論を読んだときに、多くの人は池田が取り上げた人物がまるで聖人君子であるかのように勘違いをしてしまう、ということである。「正の業績」だけでなく「負の業績」もよく知られている人物（たとえばナポレオンなど）については、池田もそれについて言及はする。あるいは人物の家族（特に母親）のエピソードを紹介することによって、その人物の人間味を演出するという配慮もしているので、さすがにそうした勘違いも少ない。

しかし日本人があまり知らない人物については、その勘違いも甚だしくなる。「池田先生が取り上げたのだから、その人物は全人格において素晴らしい」という勘違いである。極端な場合にはその人物を「人間」として見るのではなく、「超人」として崇拜してしまうことすらある。さらにはその人物の迷惑な点、非常識な性格すら、優れた業績や後世の高い評価によって帳消しになるというような勘違いも多い。「大人物は変人である」とか「偉人は非常識である」などという本末転倒の思い込みも生まれる。

ただこれは池田の人物論を読む側の責任だろう。池田は「どんな偉人でも一人の人間である」旨を、折に触れて強調している。この一点を忘れての人物論は何の意味もないし、むしろ有害である。池田の人物論は、それがそのまま歴史ではないということを認識しなければならない。人を激励するための人物論と歴史的な事実を重視する人物論とを立て分けることに留意したい。

（注）

- （1）池田大作著、第三文明社レグルス文庫、2001年。新書版で全216ページなので、人物一人あたりの分量はそれほど多くない。続編として『新・私の人物観』（2001年、全272ページ）がある。
- （2）潮出版社、1997年。
- （3）『波瀾万丈のナポレオン』285ページ。
- （4）上・下2巻、読売新聞社、1988年。
- （5）『私の人物観』206ページ。
- （6）『私の人物観』51ページ。